

参加者一覧	02
連作欄 8首の連作 自由詠.....	03
テーマ詠欄「雲」	14
一首評「そらよみ」.....	18
短歌で まちがいさがし.....	19
短歌リレーコラム「望遠鏡」	20
クロスワード	21
リレーエッセイ「いちごいちえ」	22
次回予告・編集後記.....	23

うたそら

Utasora

2024.
July

no.

21

うたそら 第21号

発行：2024.07.02

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>



#うたそら

「うたそら」では Twitter(現X) での感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

次号予告

第22号

連作欄 8首の連作 自由詠
テーマ詠欄 「夜」
一首評 「そらよみ」
短歌リレーコラム 「望遠鏡」
リレーエッセイ 「いちごいちえ」



短歌募集



第22号 24 8/31(土) 24時

• 8首の連作 自由詠 • テーマ詠「夜」1首

第23号 24 10/31(木) 24時

• 8首の連作 自由詠 • テーマ詠「昼」1首

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください
<http://kohagiuta.com/utasora/>

編集後記

今年もあっという間に半分が終わり、七月がやってきました。梅雨入りが遅かったこともあり、毎日よく雨が降りますね。すっきりと晴れた空が恋しいですが、今年の夏はかなり暑くなるとのこと。皆さま体調にはくれぐれも気を付けてくださいね。

今号もたくさんさんの作品をお寄せいただきました。ページ数の都合でクロスワードやまちがいさがしなどもご用意しています。短歌作品とあわせて楽しんでいただければ幸いです。

次号は9月発行、テーマ詠のお題は「夜」です。秋の夜長にゆっくりと味わえるような、すてきな作品をお待ちしております。

編集鳥 千原こはぎ

今号のうたそら

第21号

参加歌人様 53名

連作欄 41名

テーマ詠欄 44名

一首評 3名

コラム 石村まいさん

エッセイ 雨月茄子春さん

ご寄稿いただき
ありがとうございました!



illustration: kohagi chihara

織部ゆい	@yu_oribe	空似ほうろ	@hole46throw	まちけ	@mskpompomfuwa23
歌島孟	@sim1990	たえなかつ	@suzusuzu2009	御糸ちち	@MEATsachi
花林なずな	@mori_usagi_san	多香子		深影コトハ	@Cotoha_Mikage
廻れ井戸	@kaireido111	千原こはぎ	@kohagi_tw	水也	@m_ya-o
河岸景都	@kate_kawagishi	梅雨すみれ	@kuyusunire	深山睦美	@5757_77575
かわはう	@sukanikan_kawa	ともえ夕夏	@croissant_hey_z	虫武一俊	@mushitake
北谷雪	@kitaya_nisomiso	中村成志	@nakam8	村田一広	@mucc12022
さまぐれおゆき	@Oyukimagure	夏生薫	@kaorunatsuo	森内詩紋	@NJ40Ev5gicRpu
君村類	@kmr_r09	西淳子	@jacky24Ray	ヨシダジャンク	@jacksbeans2
雲井ひろね	@hirune_k	袴田朱夏	@nakamada_shuka	れいあむ	@Re14m_bot
雨虎俊寛	@amefurashi3107	橋本南美	@_nrkmm		
石川順一	@Hitler57	薄荷。	@aieohimeco		
石少山裏裏		廣珍堂	@hirochin_dos		
宇井モナミ	@kiyouasan	りんか	@love_kel_ina		
宇祖田都子	@Shimasyutu2020	福山桃歌	@momoka_fukuyama		
泳二	@Eshimada	古井 朔	@saku_furui		
hs	@hsweilt	真岡まな	@mao_or_mana		
計53名					

たくさんの方参加
ありがとうございました!!

21

リレーエッセイ

いちい

い

え

前号の人の短歌から一語を摘んで
それをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ

光

書き手

雨月茄子春

僕の部屋はサイコー。アイシールドが全巻ある。窓を開ければ柔軟剤のいい匂い。アパートの二階、角部屋。隣にコインランドリー。挨拶したらそうめんくれた素敵なおばちゃんも、サイコー。

僕の最近の懊悩（Oh no! 笑）。きみの最近はどうよ？（最後から十年くらい経ってんね！）僕の二〇二四年は恋にバンドに大忙し。……なんてね。でも、ときどきは短歌も書いてるよ。

大学どうしよう、って思う。休学寄りの強い気持ち。まるでゴリアテ。いつもできて。

僕の収入は3万。家賃も3万。イーブン、むしろマイナス。だけどサイコー。ちゃげばバたん？

友だちができて、それはたとえば同年代。夜、公園で人生の話をして、深まる。「深まる」は長谷川麟からもらったキーワード。深まるって嬉しい。奈良シカマルは賢い。ミジュマルはいじっぱり。ガジュマルは絞め殺し↑打つ手なし泣いていうかビジネス陽キャって何だよ！

それで、人生の話。深まったあと、デカイ時間が見えて困惑。家とか、車とか、子育てとか？子どもほしいうって思う日、ある。ピュアに。だって僕らの子ってサイコー。どうなったってサイコー。子どもって何人いたっていいかも。僕は子どもが大好き。僕の無責任な気持ち。気持ちは全部比喩になる。比喩の中で、言葉は全部本物を超える。フリスビーめっちゃ投げよう。宇宙船すべり台のある公園でお喋りしよう。そうそう、ベテルギウスって消えちゃうかもしれないんだって。ほんとかな。超新星爆発！からの再会！？ 時間つてもものすごく寂しい！
Be in love with you!（生きることって光だね！）

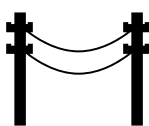
右手の甲と左足の裏を蚊に刺されて、でもね、これから負ける気がしないって感じ。

僕は額縁の全裸！ テーマパークの廃墟！ 進化するデビルバットゴースト！ デビルバットダイブ！

こんなに元気いっぱいなのに、時間が僕を追い詰めてくる。心が落ちる。落ち込みまくる。重力が強い。月の引力、全然弱い。時間は僕の部屋を通り抜ける。いい匂いごとすり抜けていく。その速度！ 暮らしを精神的自傷行為って言われてもよもやゴリアテ、傷は酒のアテ？僕の目、ちよつと悪い。だけど気にしない。僕の免疫、だいぶ悪い。だけど気にしない。僕の悪癖、ひどく止まらない！ 明日どうなるなんて知らない！ 僕はもうなつたつて光！

だから、きみの最近はどう？ 癖っ毛はまだもさもさしてる？ 答案用紙はまだ白紙？ だんだん記憶が薄れていくのが、僕はまだ嬉しいと思えないよ！

雨月茄子春



電信柱本気で蹴ったら折れるっしょみたいになんて軽くマジの気持ちだ

薄暮

雨虎俊寛

ふと見えるまなざしずっと気になって恋と呼ぶにはまだ拙くて花屋とか流行りの店が目にとまり街ごと僕の後押しをするゆるやかな水族館の斜路をゆく離れてはまた戻るひだり手記念日をするきみと自転車目抜き通りをふたり乗りして遅番のバイトのシフト増えてきてこの頃よく聞く店長のこと着信に浮かぶ片えくぼ 背もたれの助けを借りて笑い返した追っていたボールを薄暮で見失うようなきみとの半年余りよく来てたファミレス前ですれ違う自転車のぼく助手席のきみ

散歩

石川順一

アザミだと確定できて嬉しくて含羞草だと勘違いしてミニクモが椅子の裾野で踊り出す踊り止めれば温存タイムか足裏の蟬に驚き声上げる神社の木々にセミは鳴かない雄と雌上昇しながら交尾する電柱の一番上で消失

痒いのを搔かずに我慢すればいい叩くのがいい手のひらなどで大ムカデ公園で死すまだ動くオーラに満ちて木々のさやげり田の鷺が不動であるのは好ましい動き出す時不吉に感じ竹落ち葉若竹伸びるカナブンが地味色ながら落ちててもがけり

連作欄 8首の連作 自由詠 #うたそう

我^ミ

石少山裏裏

屋上猿部21

宇祖田都子

春の傘 夏の傘 秋の傘 冬の傘 わたしを 忘れて 行くな
街道に通行止めが現はれて夕橋わたるジテンシヤノムレ
立入禁止区域を突破すれば我等はプログラムかもしれず
なぜ我は此処^{ここ}にあるのかつかの間の464億^{ビッグバン}光年の中
皇帝の水族館に来るまでの旅の夜空の北斗七星
通勤の空にクジラの泳ぐ日も余裕がなくて会社に向かう
雨の日の静かな火山活動をワイングラスを回して見てる
戦の字の次に来る字ははつきりとまだ見えないがヤバイ字がある

眠うぬ夜に

宇井モナミ

この部屋の灯りを消せば星のない夜空としての最小単位
職質をされてみたくて線路沿い少し歩いたオリオンの下
ゆりかごのみどりごは母の眠る間にネバーランドへ誘^{いざな}われてる
ゆつくりと終電間近の遮断機は寝落ちみたいに首をおろした
マルチーズベビーカーへと乗せられて夜の散歩へ運ばれてゆく
眠れない人の頭を飛び出した迷える羊を保護する仕事
シロナガスクジラの夢を見たという君の吐息に残る潮の香
夏はまた夜を短く刈り取って世界を明るく見せかけている

常世に生きているワタシ

歌島孟

バカみたく滅んでいった何もかも間違えばかりしてる気がする
文明に服をその都度すげ替えて写真にいつも一人、私は
かつて見た景色を騙る歴史書の中に、私の友の名は無い
囚われているのはあなた方 永久に消えないものを求め続けて
窓からの世界が全てだとしても、何を見るかは私が決める
庭がああ頃と同じく華やいで、あなたの影が無い真昼時
いつまでも待てる時間があるのなら、いつかは会えるものなのですか？
時かける魔術以外は平凡な何度か会ったことのある人



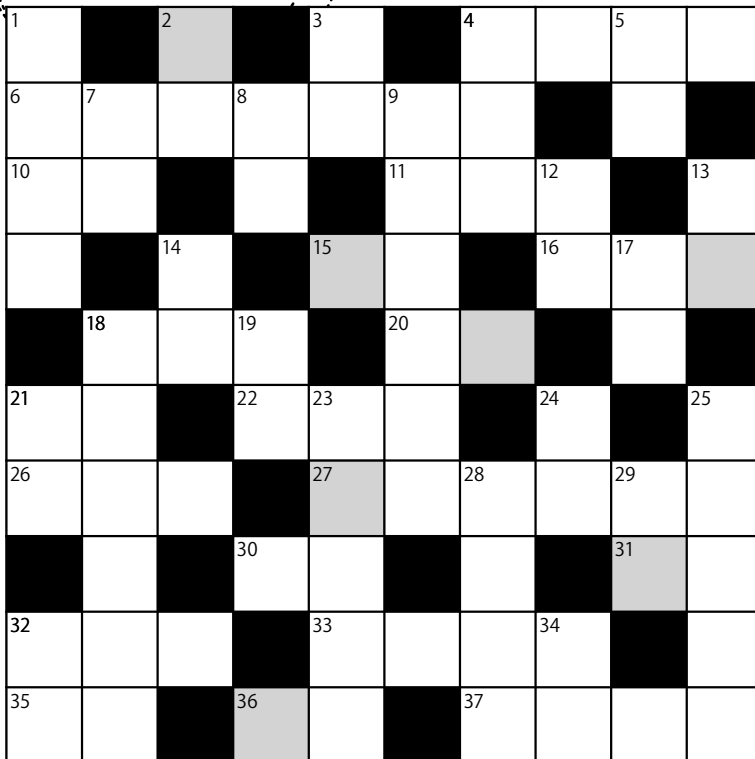
こたえ

ヨコのかぎ ★★

- 4 月ひと夜ふた夜満ちつつ
厨房にむりッむりッと
○○○○芽吹く
／小島ゆかり
- 6 内臓脂肪が気になる方は
これで定期的な測定を…
- 10 今日の次の日
- 11 「it is」または「it has」の
省略形
- 15 自分の利益だけを追求
するさま。○○的。
- 16 とびやすき○○○の汁
で汚すなかれ虐られし
少年の詩を／寺山修司
- 18 剣術家、二刀流の元祖。
宮本○○○。
- 20 ○○も実力のうち
- 21 フィルターで濾すこと
- 22 三角の帆をはった風で
進む小型の船
- 26 馬が引く乗り物。かば
ちゃ製も…?
- 27 牛と対決するのが仕事
- 30 日本人の主食
- 31 おじいさんとおばあさん
と孫と犬と猫とねずみが
ひっばる野菜
- 32 毛の生えている具合
- 33 いちばんはじめ
- 35 二人が向かい合ってい
る状態
- 36 これが出るならマスクは
必須です
- 37 薬として用いること

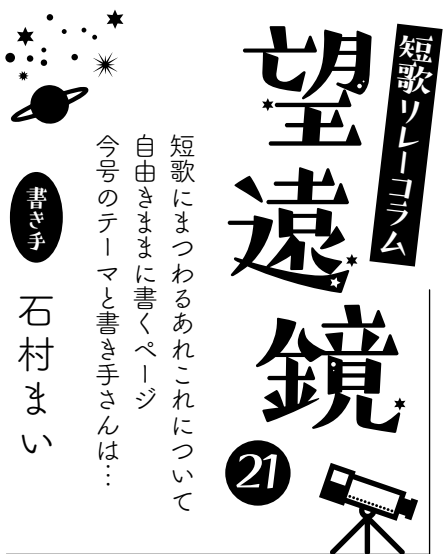


クロスワード ★★



タテのかぎ ★★

- 1 新しく事を起こすこと
- 2 痛めると大変。お尻の上あたり。
- 3 ありとあらゆる味のある筒状の
スナック菓子「うまい○○」
- 4 脚から腰まで一体の靴下のこと
- 5 僕の手にもう生傷がないことで
子○○が○○になったと気づく
／仁尾智
- 7 座るもの
- 8 ご先祖が帰ってくるとされる時期
- 9 少しでも明るい人になりたい
○○○○○○○を取り替えている
／宇野なずき
- 12 四万十に光の○○をまきながら
川面をなでる風の手のひら
／俵万智
- 13 陰と○○。○○キャ。
- 14 雨降りに必須
- 17 風水害を防ぐために、川岸に土を
積み上げて築いた堤
- 18 昔からの言い伝え。寓話。
- 19 ○○を捨てよ、町へ出よう
- 21 王様の耳は○○の耳
- 23 通勤している会社のことです
- 24 病気・けがなどが治ること
- 25 レーズン
- 28 首都はアテネ
- 29 蛹が成虫になり羽がはえること
- 32 今日の朝
- 34 欲しいと思う気持ち



短歌にまつわるあれこれについて
自由きままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

書き手

石村まい

テーマ

「ひらきたい」？

短歌を詠んだり、読んだりしていると、文字のひらき方について考えさせられる場面に遭遇する。歌会などでは特に、より良い改作案として、「ここは漢字のほうが」「いや、ひらがなのほうが」といった意見を交わすこともしばしば。大抵の場合、作者には意図があつて文字をひらいたりひらかなかったりしているが、逆の意見にもなるほどな、と感じることも少なくない。わたし個人の詠み方を振り返ると、かなりの確率で「ひらきたい」と思つ

てそのように作っている歌が多い。そして、あえて漢字を少なくした歌に対して、この箇所は漢字にしたほうが…などと思ひ及ぶことはあまりない。要するに根本的な好みのようなものがあつて、わたしは「ひらきたい」側なのだと思う。なぜ「ひらきたい」のだろうか？ ひらがなのもつイメージと、詠みたい歌や好きな歌の情景がどこことなくリンクしているからだろうか。ふつう漢字を使用しそうな文字をひらくと、余白を感じられ、ゆったりとしたやわらかな雰囲気が出る。また、初句をあえてひらがなにすることで、読者に立ち止まらせ、印象づける効果もあるように感じられる。

うすべにの湯呑みふたつを重ねおく君のにせもの来そうな日暮れ

／服部真里子『遠くの敵や硝子を』

「薄紅」ではなく「うすべに」。漢字であれば、きつちりとその色が色として提示されるような気がするが、「うすべに」には、色がのつたりと伸びてゆくような感覚がある。そこから、

ぼんやりと浮かびあがる「湯呑み」につながっていく。「にせもの」についても触れるべきだろう。「偽物」と硬く表現すると、ほんとうに「君」そっくりの像が立ち上がってくる空気感がある。しかし、あくまで「来そうな日暮れ」である。来るのかどうかわからない、そもそも現実的ともいえないシーンでは、その存在の不確かさ、曖昧さを強調するという意味においても、「にせもの」という表記が似合うように思う。

ほかにひらく理由としては、前後の表記が漢字である場合、漢字同士がくっついて読みにくくなったり、やや詰まりすぎた印象を与えたりするのを防ぐこと、というのがあるだろう。韻律の文字であるからこそ、文字を目でなぞるときのみならず、声に出して読むときの心地よさや、歌意に添うような緩急も重要である。逆に、意識的に漢字を多くすることで、硬質なイメージを歌全体にもたせることも可能だ。と、普段からふかく考えているわけではないのだが、あらためて文字のひらき方を踏まえて作歌や鑑賞をすると、また違った角度から歌を楽しめるのではないかと思う。

犬という光

花林なずな

さびしさを分けあうように目が合ったペットショップの小さな子犬
いつのまにかわたしでなくて犬達が中心となるわたしの世界
人生が色づいてゆく犬達というあたたかい光がさして
年老いて病気になるっても変わらない犬は可愛い赤ちゃんのまま
ぬくもりをこの手に記憶させるよう何度も犬の背中を撫でる
人生のことわり全て教わった死ぬ姿さえわたしに見せて
春生まれやんちゃな子犬がまた灯すころの中の小さな灯りは
じまった犬との長い散歩道わたしを照らす確かな光

白髭神社

涸れ井戸

大雨を縫うように車は走り以前住んでた滋賀の家に
ドタバタの引越して取りこぼしてた文庫ラックとネクタイと茶葉
妹の犬がバウバウ吠え続け濡れてる肩の乾きが早い
十年も住んでた家は廃屋と変わらぬくらい換装されて
実家にも居場所はなくて此処ももう棲み処ではなく雨は小降りに
窓枠に貼った防風スポンジに犬の毛と綿埃降り積む
人生の残りはアディショナルタイム チタンで継いだ頸椎で伸び
翌朝に雨は上がって白髭の神社横目に京都に帰る

ブラックコーヒー

河岸景都

これからは自力で夢を抜け出すのマグだけ傍らに置く
無理をした笑顔をやつと手放したフラップがもう水になるころ
茶柱はあの日が最後 幸福は帰れない家の柵に隠され
青春を四秒くらい取り戻す二酸化炭素を口に含んで
意味の無い歌詞を読み上げている声、氷がずつとカラカラ歌う
浴びるほど砂糖が欲しいと会話するブラックコーヒーだけを飲みつつ
牛乳を横取りされた仔牛などいるはずもなく朝がまた来る
チューハイが酩酊をいま連れてくる簡単すぎる現実だった

ゲーム

かわはう

あの頃とポリゴン数が変わらない 川島教授は今日もぶかぶか
所々虹色に光ってる道路 余さず踏んで遅刻を回避
ピクミンで培ったこのダンドリを仕事でも活かせばいいのに
適当に置いたキリンがシーソーのようにゴリラを場外に飛ばす
Flashのサ終で二度と誰からも見つけて貰えないピクトさん
火は草に 草は水 水は火に強い そこから先は何も知らない
既婚者でも構わずアタックを仕掛ける 残酷なまでのトモコレのビュアさ
ゆつくりと右から流れる赤黒のボム兵仕分けて生きていきたい

店先の雨を眺めて瓶詰め珈琲豆たちみな大人しい
 貧富にも幸福度にも関係ない苦味チャートに並ぶ産地は
 落下する湯にやわらかく膨らんで受け入れるとは自愛の行為
 つつがない夜へのまじないフィルターを店主は一、二、三回揺らす
 客たちは息を潜めた共犯のようにそれが鳴り止むまでを
 褐色の水位線を描き感情のうつわが熱を忘れ始める
 溶け残るシュガーのように何もかもエビログには話せるだろう
 薄いハムサンドでいまは満たされるこれは自分のための空腹

現在地

きまぐれおゆき

ぼくたちのタぐれの旅 改札のこつちとあつちでおわるはじまる
 くちびるにくちびるのせて漕ぎあつた順風なころ満帆なころ
 タウマタファカタンギハンガコアウオタマテアポカイフェヌアキタナタフ
 身分証ぼとり落としてかき分けるゴミかタカラか大盛貝塚
 マンモスのスガワラビランジ横たえた白き瞳は永久に凍れり
 ガラス製オーナメントが溶け出して現欧州の軽い氷河期
 心に帆をかけてこぎだす鹿児島県志布志市志布志町志布志
 白黒に千切れた道を歩かされる青いひかりの許す間に

ポップコーンしゃもしやも崩しながら観たつまらない映画できみは泣いてた
 消しゴムのかすを可燃ごみへ捨て行き着く先について考える
 仕上がった履歴書の中のおれもおれだけれどあとはずっと吹雪だ
 きみが泣いた映画をもう一度観て少しだけ大丈夫になりたい
 倒されるばけものでさえ持っている倫理を振りかざす大人たち
 ポップコーンしゃもしやも崩しながら観たつまらない映画できみが泣いてた
 今日世界はどこかで銃声がするだろう消灯した天井の重さ
 社会人の社会って誰までだろうね もうすぐ社会の夜が明けるね

散策

雲井ひろね

一杯の水を飲み干し一杯の水のぶんだけからだは沈む
 庭先にあふれるように紫陽花は思い思いにこうべをひらく
 急に我にかえったように飛び立って花を筆で奪い去れたら
 塩鮭はあかあかとしてなんとなく話せなかった失敗のこと
 ことばとはあなたに放つ鳥たちのことですどうか目を開けていて
 路地裏に八朔ひとつ置かれおり ここで生まれたわたしでなくて
 夏服をまといば軽くなる体うろこを脱がぬ生き物だから
 思いきり肺をひらいてこの胸のすみまで満ちる潮風 おいで

大好きなものならみんなはこづめにすればいいのよ雲とかもはこづめ ヨシダジャック

テーマ詠から拝借した
 短歌をもとにして描いた
 イラストのなかに
 10個のまちがいが
 あります
 見つけれられるかな？

まちがいさがし



一首評

そらよみ



前号の「うたそら」から
気になった一首をとりあげて
200文字くらいで語る
一首評のコーナーです

ほんとうはひとつの入り江としてひらく
こころを持つてうまれたはずだ

君村類

連作「生存確認」の六首目。五首目へ海流の果てに
形成されていく砂州に似ている言葉の上に立つ」と
対になる歌であろう。単独で読めば何処となく爽快
な「入り江」の比喩は、歌意に合わせて上記の歌を
踏まえることで、主体の、自己の現状に対する不満
や不安をやわらかく読者に伝えるためのキーフレー
ズとして効いている。散在するh音はそれを裏打ち
しているようにも思える。

一首評

西鎮

リラの香の薄様がいい いつの日かひそ
やかに詠む春の歌集は

桜さくら

奈良を詠んだ八首、お水取りから鹿煎餅まで春の吟
行から生まれた歌かな、どの歌も早春のやわらかな
空気が吹き込まれたように心地よい。こんな歌がで
きるのはきつととてもなく嬉しい吟行だったのだ
ろう。羨望。引用したのは八首目、ひとときわたく
しい歌で連作が閉じられる。閉じると同時にやがて
編まれるだろう歌集に向かってひらかれてゆく。甘
美にすぎることではない。早春の奈良はそのつ
くらい甘く美しいのである。

一首評

ヨシダジャック

猫をよけ猫をまたいで月淡き猫街道をた
どつてわが家

村田一広

いろいろと想像する一首。「よけ」「またいで」とい
う言葉から、主人公は猫があまり好きではないのか
と思う。その反面、「月淡き」つまり薄暗い道で、例
えば走ってくる自転車や転がっている空き缶がすべ
て猫に見えてしまうのだとしたら、病的なほどの猫
好きとも読める。「わが家」へ帰るのに、わざわざそ
んな道筋を選んでいるのか、とも。「よけ」「またいで」
「わが」とひらがなに開くことで、堅苦しさを避けて
いる。

一首評

中村成志

戸棚

くろだたけし

水源を守る小さな神様が水遊びする裸のじじい
再生の夢を見ながら死に終える五分のちのうどん兵衛
咲き終えたグラジオラスはだらしなく自分の名前もわかつちやいない
伸びすぎたお隣りの木に伸びすぎたつもりはきつとないのだろうが
おめでたいことの記念のボールペンを雑な用途のときだけ使う
真つ暗な戸棚の隅に使いかけの賞味期限が切れた春雨
雨の日があまりに続く腹いせに赤くなるまで振る唐辛子
生えなくていい草がまた生えてきて梅雨が終わればまずは草取り

窓の水量

高野蒔

目をあげてしまったときは耳だけを真珠の色で覚えてほしい
顔のない海に漂うふたたびのわたしひとりを見つけてくれる？
硝子戸に初夏を待たせて晩年のひるまを拾うように話した
揺れやすく汚すばかりの泥水はひととき青い鏡面になる
水田は窓の向こうで夕暮れのむらさきを呑む 泣かれてみたい
守られるわたしの棘は摩耗せず目をくれるなら目にもあるいは
鳥の名を知れば視界に鳥が来るように渡してしまう領分
ぬかるみになる前は春の雨だった忘れられなくて変われる

サザンウインド

桜さくら

長き日を降下してくる人を待つ雨林のようなダイニングバー
おすすめの島豆腐あり古酒のやわらかな香と夜に潜れり
旅行誌をめくれば青き風波は夏の休暇の付箋になりぬ
影もなく陽のたまりたるリビングに梅雨のおわりの夜風をとおす
いくつもの青の記憶を響かせるスマホに残るサザンウインド
「ふつうとはつづけること」にうなずけり海岸線を素足で歩く
ラテン語の詩集のように眺めおり風をあやつる鷹の姿を
夏めいてすすめる白いパナマ帽 男の価値は髪になくても

列

西鎮

くつがえすことのできない誤解にも似てかたくなに雨、六月の
ノブレス・オブリージュ もう誰ひとりまねかぬ庭に立つ月桂樹
はつ夏のフル・オン・ザ・ヒル 兄さんは笑ったときの涙がきれい
禁煙に失敗するたび先輩はすこしやさしい先輩になる
いい加減なぼくの欠片のような詩がときどききみに届くと聞いた
脳内に六角精児が棲んでいてときどき電車の旅へ出てゆく
あの夏にクラスみんなで始祖鳥とおもったあれはなんだったつけ
鳥だ、って誰かが言って足どりがやや軽くなる列でよかった

「そらよみ」一首評募集



ご投稿はこちらの
投稿フォームから！



前号の「うたそら」からあなたのお気に入りの一首を引用し、
その歌について 200文字以内でお書きください。

お一人につき一首まで。

ご自分の短歌ではなく、他の方の作品でお願いいたします。

公序良俗に反するもの、作者や他人の人格を傷つけるような
投稿は掲載できませんのでご注意ください。

猫の顔してないほうのロボットが客席間を働いている
お尻から横にずれつつ角丸の店内すみっこ広いソファーよ
コロボするキャラを知らない僕の見のコロボしてない普通のメニュー
包み焼きされてるものはそれだけで美味しい味を連想させる
子どもむけメニュー開けば一面に青い耳なし猫型ロボット
パフェの日の6月28日にココスで食べたことがあります
もし推しができたらきつと連れてゆく傷のつかないアクリルスタンド
日曜の午後はシニョンの店員を背に扉を押してから始まる

メロドラマ(っ)

たえなかず

夏の底

千原こはぎ

うつせみのドトール重ねたカーディガン重ねた嘘をにぎり頬づえ
天球からはみだす、あふれる しあわせについてあなたはなぜか謝る
雨やどり電話ボックスこの世界果てから果てまでわたくしのもの
たどりつくパワースポット雨上がり感情の波いま四方から
将来と言うより未来、虹、かなあ アヒージョばかり見つめてふたり
わたくしは歌人失格 魂の響きと字面が大嫌いな
海の町、空の町から来たでしょう エスパドリーユが暗がりを蹴る
ブラインド越しの光が誘うからTシャツでゆこう湘南か死へ

雑踏に入道雲は湧きあがる ひとりで生きていくはずの街
この世から切り離されてはじめての店の窓から外を見ている
汗をかくアイスコーヒー きみといた夜の机の上の水溜
たぶん意味なんてない返信のないこともなんでもない 遠いだけ
この街にきみはいなくてこの街をどうしてすきになっていこうか
にわか雨 ありがとう、翳りはじめてたわたしにシンクロしてくれる空
もうなにもできそうにない夏の底ここから立ち上がることもなく
水色はノスタルジック きみがいたいつかを反芻しつつゆく夏

純白をめざしつときに空を裂き光の輪のなか世界をうつせり

◆ 古井 朔

雨雲にせかされ急ぐ自転車のペダルにネズミがグルグル走る

◆ 真岡まな

雲間から射した光に清められわずかに顔を上げた紫陽花

◆ まさけ

スカイツリーは雲の深さを知る定規 蔵前橋からしばし眺める

◆ 御糸さち

真っ白のままin.にした物語うろこ雲もつとちぎれてしまえ

◆ 深影コトハ

流れてく雲の速さに目をみはるあしたの気配背中をたたく

◆ 水也

暗いだけで雲が終わってつまらない逆転負けに濡れられもせず

◆ 虫武一俊

曇り空のもとに目覚めし夕顔は夕陽も見ずに生を終へにき

◆ 村田一広

少年は歯を食いしばり駆けていく夏雲に盗られそうなその影

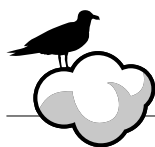
◆ 森内詩紋

大好きなものならみんなはこづめにすればいいのよ雲とかもはこづめ

◆ ヨシダジャック

衝天しょうてんのアガヴェの花の咲くを待つ夕焼雲と人の背の波

◆ れいあむ



「雲」

テーマ詠

- ◆ 退院が決まり自宅へ帰る義父雨雲低くこれからのこと
- ◆ 空欄は空のわりには小さくて好きなかたちの雲が描けない
- ◆ 飛行機雲つてつまりは排気ガス 西で紅と藍とが争う空の
- ◆ 泳がないわたしのためにオオルリよ雲海高くあの朝へ啼け
- ◆ ペンギンがジェット機みたいに飛んじやって、そいつのおならで飛行機雲じゃん
- ◆ 雨雲のリーダーにらむ丸腰のわれと二歳を濡らさぬように
- ◆ 遠足と授業の用意を持っていく重さをわたしのせいにされても
- ◆ 少しだけ雲の切れ間とあの人を待ちわびて待ちわびて雨だれ
- ◆ 禅寺へ雲の如くに龍は降り梅雨の深さの警策を打つ
- ◆ 塗り重ねるゴツホのような雲つつむ恥ずかしがりの月のおくるみ
- ◆ 雲一つない八月の空のもと俯いている影の短さ
- ◆ 梅雨すみれ
- ◆ ともえ夕夏
- ◆ 中村成志
- ◆ 夏生薫
- ◆ 西淳子
- ◆ 袴田朱夏
- ◆ 橋本南美
- ◆ 薄荷。
- ◆ 廣珍堂
- ◆ りんか
- ◆ 福山桃歌

あいからせまで

ともえ夕夏

アイロンのいらないシャツもいるシャツもひとしくそよぐ梅雨の晴れ間に
上を出せ上を出せとふひとのゐてわたしのうへに浮かぶ綿雲
おかしいな2キロも増えた100gのケーキ2個しか食べてないのに
聞くまでもないしあはせな愚痴ばかり聞かされてゐる夜のサイゼで
結論を先に言へとふひとのゐて膨らまぬまま夜が終はりぬ
コサージュをつけても何ら特別なふうにはならなかつたわたくし
シスジェンダーだから疑ふわたくしがあなたを好きにならないことを
生活のせいとかそれとも性格のせいとかコンロの焦げが落ちない

鋼の絆（#いろは鬼いちごしりとり より）

中村成志

ホムンクルスの紅と比べて人間の濁った暗さ、だからこそ前へ
鍊成陣を溶いた卵で描く午後さあ生命よここへようこそ
練り上げたその掌を合わせ駆け巡る刃の疼きから瞳逸らすな
野良犬の額の傷の血走りの目の天を向くささくれの、尾
不幸自慢の科白を競う時は過ぎ甲冑へ潜ませるなでしこ
禁忌に果てがあるなら絶対辿り着く 汽笛、発動機音、はつ冬
陽に焙られ砂に叩かれ後はまあ推して知るべし掌の紋様も
過ぎてゆく想いをかたちに変えた手へ長くて淡いキスを、終演。

ペンギンに翼

西淳子

人間と樺太犬が喧嘩です。仲裁役はペンギンでした
「ペンぎん」をどっかの地方銀行の略名だつて勘違いして
ペンギンが水族館の警備員として巡回している3時
紙コップでつくるペンギン。紙コップ、逆さまでけど、それが、よかった
ペンギンがプールサイドを走るからプールサイドに増える貼り紙
夕方のチャイムに合わせてペンギンと帰宅部員の俺が遠吠え
ペンギンの画像をすべて選択して、私はロボットではありません
ペンギンに翼 意味とかないじゃんね ないのにきみは遠くになって

雨八首

袴田朱夏

あの雲の高さから落ちたにしてはやさしい雨だ さよなら、ディラン
無理すんな止まない雨はないけれど降らない雨もないんだからさ
とうめいな鶴になりたい 雨つぶをまとったときにだけあらわれる
墜ちた子をかばうカラスとわたしとに雨は等しく停戦を告ぐ
散文では逃してしまふ 雨の日にチーズケーキを焼くあたたかさ
あれは月、おでこには雨。こんなこと話せばきみはわらってくれる
しばらくは生きるしかなく病棟にいる人たちと雨をさがした
戦争もガラスについた雨粒もすべてが向こう側にあること

「太っちゃう」「子どもは成長だよ」少し考えて「また成長しちゃう」くつぬげたトイレの紙がなくなった「小学校どう?」「きょうも泣いたよ」ママ将来何になりたい?つくりたいものになれる世界をお迎えのインターフォンで部署を言う先生のまま走ってきたよまど・みちお天才じゃない?教科書のきやきゆきよの歌の音読のあとなんかいいわたしじゃない土砂降り歩く七歳の生きる基準(はーと(はーと(の)ばら(ひ)まわりおめでと君が育てた君の感性隕石が落ちた日だつてきつとこう無防備を吹き飛ばす感動

たかいところと、ひくいところ。

薄荷。

きらきらと騒ぐ波たち見おろして海の真上を飛んでくロケット転がって落ちてきそうに真ん丸な月を支える紅白鉄塔真つ白な夏のひかりに照らされてゆつくりと目を開くひまわりだんごむし道路のわきで生きていて完璧な丸が転がっているパンプスの踵三回鳴らしたら新月の夜は空が賑やかペタペタと鳴る床の音軽やかに裸足のふたりはふざけあつて週末の疲れたからだを脱ぎすてた海月が泳ぐ白いバスタブ浴槽の深いところから眺めれば淡いクリーム色の天井

東雲のいろ山の端にあらはれて北山今日も街を作りぬ新米の看護師をちつと先輩が待つ朝一番の忙しさおはやうのスタンブ跳ねて行き交ふも病棟すべて通話禁止であさばらけ知らぬままなる朝ならば盆地の街は雨の庭なり食パンとトマトの今朝の仲違ひオリブオイルが有めにはひる定期券見せステップをしゆつと降るる女生徒が開く水玉の傘朝六時採血のワゴン押す音と眠れぬ夜を過ぎし患者北山は昨日の夏日忘れしや東雲の影窓に映して

なついろ

りんか

風そより木木がざわめきほのかなる隠したところ飛ばされそうに薄雲がわたしのほうに近づいて蚕の糸がわたしを包む雨だれを叢雲たちがなぐさめるわたしの糸にきらり、希望がグラウンドをゲリラ豪雨が抱きこんで稲妻うつすきみの横顔雨上がりきみの足跡にかさねてる歩幅がずれる、わたしはここよあと少しきみのもとまで追いつけば揺れるリボンのセーラー熱くふりむいたきみの目の先にいるわたし吐息の粒が雲になつてく思い出す。あなたが知らぬ青春の夏の葉がはらりと落ちて

雨雲に山が吸い込まれるように輪郭が溶け時間が戻る

◆ 涸れ井戸

きつとまた会えるんでしよう旅先で、雲から伸びた梯子の上で

◆ 河岸景都

少年が入道雲から飛び降りてはるばる駆け寄る赤のパラソル

◆ 氷谷雪

入道雲わんさか湧いている空の真下でひとはみな水を抱く

◆ 君村類

もうすこし根性があれば雲くらい生めたのにね、とあなたの寝言

◆ 雲井ひろね

いちめんの青は痛くて雲ひとつ浮かべるためのフィリップモリス

◆ くらたか湖春

姉さんのサンダル履けば背伸びするよりも近くにみえた夏雲

◆ 西鎮

君に似て僕を無邪気に振り回す真夏の空の雲の輪郭

◆ 白石夜花

月一のチートデイにはひっそりと茹でる雲呑食べる仙人

◆ 空似ほうろ

夏・近視・心変わりのせいにして中央道の上に雨雲

◆ たえなかず

きみという時間を梅雨にしてしまう雲ばかり吐き出してたせいで

◆ 千原こはぎ



「雲」

テーマ詠

- ◆ 羽ばたいて雲の果^はたてに飛び込めばあなたのもとへ降れるでしょうか
- ◆ 太陽に素直な雲の横顔を見上げて反ったうなじが焼ける
- ◆ 哀しさ悔しさ寂しさ愛しさのどれを選ぼう 雲が過ぎゆく
- ◆ 岩倉は晴れて居るのに遥か東紫の雲の固まりがある
- ◆ 空欄を埋めよと命じる問四を入道雲でいっぱいにする
- ◆ 口噤み雲の動画を切り刻むスマートフォンが船になるまで
- ◆ 国道を走る雨雲より早く君と会うため声を聞くため
- ◆ 雲がゆく空の境をみきわめてどこから宇宙どこからが天
- ◆ 気まぐれな雲は形を変えながら大丈夫と涙を拭う
- ◆ 未来から来たんだよって嘘をついて、あなたは遠い雲を見ている
- ◆ 頼りないわたしのことが心配でたまに出てくる犬形の雲
- ◆ 花林なずな
- ◆ 歌島孟
- ◆ 織部ゆい
- ◆ h_s
- ◆ 泳二
- ◆ 宇祖田都子
- ◆ 宇井モナミ
- ◆ 石川順一
- ◆ 雨虎俊寛
- ◆ 麻倉ゆえ
- ◆ 碧乃そう

おおさかぐうし、十周年！

福山桃歌

眩しい

まさけ

十年分老いた指先 選び取る色は十年前と変わらず
もう二度と会わない人が夢に出てまぶしく見える生駒の稜線
窓ガラス越しになぞった朝の街 満員電車にももう慣れた
こんには世界の国からこんにはゆめのしまにもさくらは咲いて
だいぶ語尾変わったじゃろお？ そんなことないよって言われたくて わざと
乗り換えももう迷わないからやかに歩くうめきたアンダーグラウンド
淀川を下っていけばふるさとにいつか着くからもう大丈夫
ハルカスが夕陽に染まりおしてるや大阪暮らし十一年目

記憶の海

古井 朔

記憶の海溺れてボクラ沈みゆく風いだ水底セイレーンの歌声
やはらかに海月の骨を穿たれし君は知らない虚数の意義を
ゆるやかに流れゆく水底にいつしか積もる記憶の小石
思い出が剥製になる夏至の朝あるときもつと耳を澄ませば
赦すとか許さないとかどうでもいい今日咲いたあの花はいつ散るの
まどろみの島にて眠る花を摘み虚ろな短夜サティ聴く
思い出がタイムラプスのアルバムに消えては浮かぶ偽りの記憶
紫陽花の無限の前にうでをふり辿り着けない記憶の余韻

スーパーバブルボブル

御糸さち

始まりと終わりの数は同じだと君が言い始めて言い終わる
君のこと傷付けてしまったあとの僕に残っている線条痕
賞味期限切れそうな充填豆腐ふるえることもできずにねむる
あわ・あぶく・ばぶる・うたかた・ゆめのなかみみたいな音を伝えられない
どうしても存在しない二芒星 星の形の星は嘘だろ
青嵐 どうしても会いたい人と僕の間^{リンドウ}に吹くむごい風
^{Ctrl+N} ^{Ctrl+Y} ¹²³ ^{リンドウ} ^{アンドロイド} ^{アンドロイド} 何度でも君の家への道を歩くよ
モブ同士確かめ合おう生きている意味なんていう意味のないもの

カクテルパーティー

深影コトハ

平服とは何かを決める審判が行われているクローゼットで
妍うつくしいものはずつしり重たくて結い上げた髪も金の刺繍も
はつ夏の紫外線にはご用心目に見えない傷みにご用心
まだドレスの色に強さを借りていて黒は私に似合わない色
壁に咲く紫陽花みたい群衆モブとして青にも紅にもなれる人たち
シャンパンの泡のリズムはスタッカートあなたと指が触れ合う手前
もう少し昼間の顔をしていてね小指のアレキサンドライトよ
特別な一日になるにはまだ遠く少し踊ってみる夏の宵

騙るものごと

水也

とりどりの信仰より選び摘んだいいひとの佛おぼかすをみる
うそつきに甘いくりいむまとわけて美味しくいただいた残りもの
魂の重さぶんだけ口にする熱い紅茶をひとりぼっちで
身を削いだあこがれにいる、今、わたし消えてしまってもいいかもって
大丈夫 いつわりでもね大丈夫って言うだけで傷ついていく
青白いほのおがゆれている夜に月は落ちてく湖の底
空白を仰ぎ見るよう綴られた物語の終わりは知らない
密室はすべてひらかれたあとから閉じられている幻想のなか

紫陽花を見にいきましょう

森内詩紋

カーテンは緑むこうに赤い薔薇 カッコウカッコウ 六月の朝
紫陽花を見にいきましょう夏蕎麦も美味しい季節 今日「旅」です
ええ、そうですあれが母校であの寺の裏に親父がねむっています
どうかなあ 十年くらい前まではここが地元な気がしてたけど
575さらに77うん少し長めなんです短歌ってのは
「うた」なんてわからなくていいんです心がふるりと揺れたらそれで
プロジェクト成功しますよ先輩が手を抜かないの知ってますから
夕暮れに祈る小さなこの旅が明日の支えになりますように

青森

ヨシダジャック

青い森鉄道線で一度きりりんごの花とすれ違いたり
鳥籠にもきつと春は来るとうたいつづけるさくら祭りのこどもたち
行き先のないぐるつとバスから実在の寺山修司記念館見ゆ
きみはいい子になった褒美としてきみになったのか おとうとの椅子
わかるのは鳥のことだけそう言っであなたはくり返しくり返しりんごを洗う
月曜の朝というのにおとうとの机も椅子も捻れていない
とても素敵な話でねというように鳥は歌えり空ぐらかりき
こんなにんごは見たことないよと少女らはバカでかい銀色のコルトで

イエーイ オニスズメ

深山睦美

そんなのが許されるならなんだってできる気がした イエーイ オニスズメ
お互いに助けあえればいいのにね万引きGメンGメンGメン
棺桶に入れられないもの一覽に生き物とある暮れの火葬場
すみませーん！降りまーす！と言っていいこう渋谷駅でも生きるべきでも
地球から脱出できない人間の数を求めるフェルミ推定
俺が見た悪夢を都庁に映し出す権利を誰が買ったんですか
裸だと気づいた後の王様は裸の定義を変えようとした
本当に食事のときも寝るときも検討し続けてたら、どうする

カステラにはザラメ

村田一広

身綺麗にせざらば餌も貰へまい野良猫はせつせと身繕ひ
温泉に一瓶のシャンプー落としたら泡が湯船を覆ってしまふ
(今のところもう一度再生してください) 車窓よりし青き人影
細き脚剥いたところでほぼ肉のあらざりし五百円のずわい蟹
密封をされし食パン外袋とレジ袋濡れてもパンはそのまま
カステラがカステラとしてあるためにべとべと感の絶えぬ指先
この店のモンブラン買はうか口コミでは栗ちやなくさつま芋の味と
紅の薔薇の花びら白粥に散らして病回復の気配

アガヴェエ

れいあむ

電波さえ届かぬ場所まきにいるひとにサクラ咲いたと抱きつきたくとも
散り桜山のあわいに見える部屋あなたはさめほろ「帰る」と泣いた
二度ばかり過ぎた寒さの向こうがわ空のシンクに水温む朝
赤茶けて溝のかたちに輪を描く乙女椿の花びらの死骸
生垣にくたりと垂れる四葩よひらありあるじ偲ぶかまだ水待つか
言の葉の嵐の最中さなかきみの云う『すき』が重みを帯びた夏宵かしょう
雨樋あまどいに這うほ這うつむり吾のごとく生きてはならぬと紫陽花あじさいへ遣りや
催涙雨さいるいうじつとりとしてゐる静寂しじま首すじに汗、さあ夏よ来い